

全日本アーチェリー連盟  
世耕弘成 会長  
田中 伸周 代表理事 兼 理事長、普及部長

2026 年 1 月 23 日  
有志署名活動 有志一同

## 2026 年度ベアボウ部門の大会構成に対する抗議文

この度の全日本アーチェリー連盟（以下、全ア連）による「全日本ターゲット選手権大会」および「全日本社会人ターゲット選手権大会」のベアボウ部門の一本化に強く抗議し、撤回を要求いたします。

本決定に対する反論は以下となります。

反論構成：

- ・全ア連の目的/理念・定款・中長期基本計画との矛盾
- ・全日ア連競技第 25-047 号（2026 年 1 月 15 日）に対する反論

1 月 31 日（土）までに正式な文書を以って誠意ある回答を求めます。誠意ある回答が得られない場合は公益財団法人日本スポーツ仲裁機構を含むそれ以外の第三者機関への申立てを行うことを考慮せざるを得ないことを申し添えます。

## 【全ア連の目的/理念・定款・中長期基本計画との矛盾】

- ・ 目的/理念との矛盾

全ア連の目的/理念は以下の通り定められている。

### 目的

私たちはアーチェリーを通して、健康的で明るく、心豊かな生活を創造します。

そして、日本と世界の人々が信頼で結ばれることが、私たちの真のターゲットです。

### 理念

私たちは3つの「F」に基づいて行動します。

- **Fairplay**：互いを尊重し、公正かつ誠実に行動します。
- **Friendship**：老若男女、ハンディキャップ、国境の壁を越えて、仲間を増やします。
- **Fightingspirit**：目標に向け、日々の研鑽を惜しまず、自己を成長させます。

今回の決定はベアボウ選手を尊重したものでなく、公正かつ誠実な行動ではない。

全日本選手権において、すべての公認競技種別が「同じ舞台・同じ日程・同じ基準」で日本一を競うことは、連盟が掲げる「Fairplay(公正)」の理念を具体的に体現するものであり、これを欠いた運営は、この理念に反するものである。

また、「全日本」という名称がつけられるとはいえ、突然特定の競技種別のみが他部門と異なる方法・異なる大会枠で全日本チャンピオンを決定されることは、これまでの全日本選手権のタイトルの継続性を損なうことに加え、競技レベルの高低や参加人数の多寡にかかわらず競技間の価値に不当な序列を設ける行為である。本決定は、公平性・一貫性を著しく欠くとともに、ベアボウ部門を制度上「例外的・周縁的な競技」と位置づける行為に他ならない。少数者・多様性を維持することが、その社会にとって発展の基盤を強化するために必要であることが社会一般的にも認知される中で、本決定はこの社会通念に逆行する。

- ・ 定款との矛盾

全ア連の定款において、目的及び事業が以下の通り定められている。

## 第2章 目的及び事業

### (目的)

#### 第4条

この法人は、わが国におけるアーチェリー競技会を統括し、これを代表する団体として、アーチェリーに関する事業を行い、もって国民の心身の健全なる育成に寄与することを目的とする。

### (事業)

#### 第5条

この法人は、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

1. アーチェリー競技力向上・普及及びこれに付随する事業
2. その他この法人の目的を達成するために必要な事業

本決定によって、全日本選手権のベアボウ部門が他種別と

- ・ 同一日程で開催されない
- ・ 同一大会として扱われない
- ・ 他部門と同等の「全日本チャンピオン」という称号が担保されない

という状況が生まれ、ベアボウ競技者の競技目標設定を困難にし、トップレベルを目指す動機付けや競技継続意欲を大きく損なう結果となる。これは、定款に定められている“アーチェリー競技力向上”に反するものである。

また、現状ではインターハイ・インカレなど高校生・大学生の上位大会にベアボウ部門が設定されていない。これは、全ア連によるベアボウの普及事業が不足している状態を示している。

・ 中長期基本計画との矛盾

中長期基本計画は「本連盟の理念・行動指針に基づきビジョンを作成する」とされている。その中で、競技部及び普及部のアクションプランに以下の記載がある。

**【目指す姿】**

(1) 多様な人や団体が参加できる競技会やイベント機会の創出

全日本選手権から一つの部門を削除することは、競技会として参加できる人や団体の多様性を失うことであり、競技部及び普及部の目指す姿と矛盾する。

また、国際部のビジョンには以下の記載がある。

**【国際部ビジョン】**

日本のアーチェリーコミュニティが国際的に高い価値を持ち、世界から認知・評価を得ている状態を作る

競技力のみならず、先進的な取り組みを通じて日本のアーチェリーコミュニティが広く認知され、高い評価・価値を有している状態を目指す

国際的にベアボウ大会は広い裾野で行われている。例えば、アジア圏最大のベアボウ大会である Barebow Asia Championship には 12 か国から約 400 人が参加している（2025 年）。その中には日本からの参加者もあり、優秀な成績のみならず国際的な交流を持ち、各国から高い評価を受けている。

全ア連も世界のベアボウ大会の背景や発展方法について調査し、アーチェリー人口の多様な裾野を広げていくことこそが求められるのではないか。

## 【全日ア連競技第 25-047 号（2026 年 1 月 15 日）に対する反論】

通知の中で、決定に至った背景が 4 つ挙げられている。それぞれに反論を示す。

■ ベアボウ部門がターゲット競技に加わった以降の過去 5 大会において、全日本ターゲット選手権のベアボウ部門に高校生・大学生の参加が全くなかったこと

インターハイ・インカレといった全国高体連・全日学連の大会にベアボウ部門が作られていない中で高校生・大学生の参加を求めることは難しい話である。全ア連の普及活動としては、「笑顔をつなぐアーチェリー」イベントでのデモンストレーションが行われたのみで、高校生・大学生をターゲットにした普及活動はこれまで行われていない（高校全国選抜大会にてデモンストレーションが行われたことはあるが、これは高体連が主催したものである）。このような普及活動の不足がこれまで高校生・大学生の参加が得られなかった大きな要因だと考えられる。例えば、目黒区アーチェリー協会では、協会の努力により、リカーブ選手と同数のベアボウ選手を継続的に輩出しており、全日本社会人ターゲット、全日本ターゲットへも出場している。各カテゴリーにおいて目標とする大会を用意することは、各地での普及につながるはずである。

一方、そのような中でも高校生・大学生のベアボウ競技者はゼロではなく、今後全日本ターゲットを目指す高校生・大学生が出現することも考慮する必要がある。実際、第 35 回全日本室内アーチェリー選手権大会には大学生・高校生がそれぞれ 1 名ずつ出場権を獲得している。これらの選手は、今後全日本ターゲットの出場も視野に入るレベルと考えられる。また、過去には全日本フィールドであるが中学生がベアボウ部門に出場した実績もある。

このような実情を把握することなく、全日本ターゲット選手権の申請状況のみで高校生・大学生のベアボウ競技者がいないかのように論ずるのは大きな間違いである。

高校生・大学生のベアボウ競技者が何人存在しているのか調査を行ったのか、その有無と調査をした場合の調査結果の回答を求める。

■ 社会人大会との参加層の重複により、両大会の独自性が確保しづらい状況であったこと

近年、複数種別に同時に取り組む選手が一定数いる。そのような選手にとって、大会ごとにどの種別に取り組むかを考えるのが一つの目標になっている。実際に、社会人ターゲットはリカーブで、全日本ターゲットはベアボウで出場した選手や全種別での優勝を目指す選手も存在する。大会の進行上、一つの大会で複数種別に同時エントリーすることが不可能であるため、複数種別に取り組む選手にとって「全日本ターゲット選手権大会」および「全日本社会人ターゲット選手権大会」が共存する意義がある。それに伴い、ベアボウのみ取り組む選手にとっても大会によって競争相手が変わることになり、そこに独自性が無いとは言えない。

この点について、中長期基本計画において競技部アクションプランの【目指す姿】では、「(3) 選手の目的に応じた競技会コンセプトの明確化と競技会毎の独立採算の実現」とある。今回の決定は「選手の目的に応じた競技会コンセプト」という重要な要素を度外視していることが分かる。

従来のものであっても全日本ターゲットと全日本社会人ターゲットの独自性が存在している中、今回の決定によってこれまであった独自性が失われることになることが懸念されるが、全ア連はどのように考えているのか回答を求める。

なお、社会人大会との参加層の重複は、前述の通り、全ア連としての普及活動・対策が無かったことにより生み出された状況と考える。

■ 申請基準点や取得スターバッジの緩和を行っても参加定員に満たない状況が続いていたこと

ベアボウ競技がターゲットの公認となった2021年以降の全大会の申請基準点と取得スターバッジの条件を確認したが、緩和を行った事実は無かった。

全日本ターゲットにおける定員割れの状況は、ベアボウ男子においては2023年の1度のみである。ベアボウ女子については2023年～2025年の3年続いているが、コンパウンド女子が2021年～2025年の5年間定員割れが続いており、定員割れはベアボウ特有の問題というよりも女子選手の参加拡大の方に課題があると考察できる。

なお、社会人ターゲットにおいては、2021年～2025年の5年間で一度も定員割れを起さなかったのは唯一ベアボウ男子部門のみである。

事実に反する事項を基に検討した原因について明確な説明を求める。

■ **ベアボウ競技の普及を進め、より参加しやすい全日本大会を目指すこと**

全日本レベルの大会を減らすことがベアボウ競技の普及を進めることにつながる理由が述べられていない。

全ア連の中長期基本計画においても、ベアボウ競技の普及について具体的に言及されてなく、全ア連がどのようにベアボウ競技を普及していくかビジョンも見えていない。そのような中で、今回の決定が「ベアボウ競技の普及」を名目に進められる理由にはならない。

全ア連が「ベアボウ競技の普及」にどのようなビジョン（数値的目標を含む）を描いているのか、また、中長期基本計画に記載されていないビジョンがいつ作られたのか明確な説明を求める。

以上